

---

# 祈りの夜に雪は降る

ゲイルライダー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

祈りの夜に雪は降る

### 【Nコード】

N8051Z

### 【作者名】

ゲイルライダー

### 【あらすじ】

仮面ライダー達にもクリスマスはやってくる。光写真館に居座る士は、さびれた公園で、海東大樹とサンタクロースについて語り合う・・・。

十二月二十五日。神の子は人として現世に降誕した。

現代人の間ではクリスマスと呼ばれ親しまれている祝日である。

断るまでもない事だが、この日はナイフで切りつけるような寒気が表皮を襲う冬の季節。

しかし街には、これっぽちの雪も降り積もらない。

これではわざわざ公園で足を休めて、シャッターチャンスを待つ意味がない。骨折り損の、かじかみ儲けた。

二眼レフのトイカメラを首にぶら下げた青年　門矢士は木造りのベンチに腰掛けながら、心のうちで一人ごちた。

平時彼が根城として居座っている光写真館は、現在戦場と化している。

士と同じく居候の身分である青年、小野寺ユウスケは、欣喜雀躍してツリーの飾りつけ作業に熱中している。

自作のクリスマスソングを口ずさみながら電飾やキャンディケインを装飾する姿は、土に憐憫の情を抱かせて余りあるものだった。

写真館の主たる光栄次郎とその愛孫光夏海は、七面鳥の丸焼きと特大ケーキを準備中。

クリスマスにはパーティーを催して大騒ぎするというのが光家の風習らしい。

繁華な雰囲気を好むユウスケは率先して協力しているようだが、土自身は別段クリスマスというイベントに興味はなかった。

しかし自分以外の人間が全員パーティーに参加するのだ。彼とて出席するのはやぶさかではない。

その事前段階として、土には色調豊かな円錐帽子やクラッカーなど、小物の買い出しが命じられた。

彼自身は使用用途の少ない消耗品を好まないが、それで和氣藹々とした集まりに水を差すほど無粋ではないと自負している。

一時とはいえ、思い出を形作るという意味において、これらが優れた品である事は事実だ。

手早く購買を終えた土ではあったが、そのまま帰るだけでは何か味気ないとふいに考えた。

彼が写真館を離れる前、三人の創作物は終了には程遠い工程だった。少し時間をずらして帰宅すれば、彼らも得意満面で成果を自慢できると言うものだろう。

何よりイルミネーションなどを撮影して写真を持ち帰った方が、より自分らしいパーティーへの貢献なのではないか。

そういう腹構えの下、彼は少々遠回りをして賑やかに過ぎる喧騒を通り抜ける事にした。

この日に備えてあらかじめ用意していたのだろう。

さまざまに創意工夫に満ちたアートに等しい光輝の景觀が土を出迎えた。

丹念に意匠をこらし、遊び心を尽くした情熱が、一つ一つの細工に見て取れる。

これは充分な戦果が期待できる。背中を走る興奮に突き動かされるように、土は嬉々として写真撮影に興じた。

そうしてあらかたの被写体を四角の画面に収めたあと、土は休憩がてら公園に足を向けた。

だが無為に時間を浪費するのは彼の性分ではない。幕間にも隙あらばとカメラを用意しているのだが、どうやら土が足を踏み入れたのは、閑古鳥が鳴く寂れた遊技場のようだった。

光写真館に比較的近い場所だから訪れたというだけで、彼を引きつける要素は皆無だ。

これで雪でも降ってくれば多少絵になるのだが。

そんな益体もない思索にふけている時、不意に後ろから声をかけられた。

「メリークリスマス。突然だが君は、サンタクロースについてどう思う？」

「．．．．．あれはひどい老人虐待だ。白ひげをたんまり蓄えたじいさんに、鞭を打って重労働を課しているんだからな」

「なるほど、僕もほぼ同意見だ」

意図の読めない質問に対し律儀に対応した後、士は振り返る事も面倒と判断したのか、誰何するでもなく鎮座を続けた。

「独り身でいる事が遂に虚しくなったか、海東？」

「その台詞、人一倍寂しがり屋の君には言われたくないな。士」

断りを入れる事なく、その青年は士の隣に腰を下ろした。

彼こそは数多の世界を駆ける怪盗ライダー、海東大樹．．．とは本人の言。

だが士に言わせれば、彼のなす所業はコソ泥のそれと大差ない。火事場泥棒を上品に言い換えただけに過ぎないようなものだ。

「冬の夜に雪も降らない。つまらない世界もあつたものだ」

「そう思ふんなら、さっさと余所の世界に行けばいいだろ。ここに

「お前の大好きなお宝はないぜ」

「僕の行く先は僕が決めるさ。それに、これからナツメロン主催のパーティーに出席する予定なんだ」

「お前を招待した覚えはないぞ。それにナツメロンじゃない、あいっはナツミカンだ」

土のまったく的を射ていない指摘を無視し、海東は懷から手紙らしき物を取り出した。

宛名は大樹さんとある。筆跡から見て、夏海が書いた者と見て間違いないだろう。

「ナツメロンは良く心得ている。主賓がいなくては、パーティーも盛り上がらないだろうからね」

「勘違いするなよ、海東。お前はただの引き立て役で、主役は俺だ」

「つまらない冗談だ。君程度では、助演がいいところだろう?」

さらに言い返そうとした土に、海東は素早く缶コーヒを差し出す。

「せっかくのクリスマスだ。今日ばかりは、争いは抜きにしよう」

機先を制された形になった土は、所在なさにスチール缶を受け取

った。

何はともあれ、冷えた体に熱い飲み物はありがたい。

もしあと五秒ほどコーヒーを見るのが遅れていたら、既に彼の城と化したベンチから、海東を追い出す算段だっただけに。

「ところでさっきの質問は、いったいどういう意味だ？」

「特に理由はないさ。強いて言うなら、もしサンタクロースがいるとしたら、どんな人物かと思ったただだよ」

注意して観察してみると、海東は空いた左手で小さい物体を弄っていた。

白と黒の、それはどうやら何かのスイッチらしかった。

「そんなのは決まってる、とびきりのお人好しだ。たぶんユウスケレベルのな」

「だろうね。そうでもなければこの寒い中、トナカイを従えてプレゼントを配ろうとは思わない。はっきり言って、なかば狂人の発想だ」

閑散とした公園に、プルタブを開ける音が二つ響いた。

白い雪は降らないが、黒いコーヒーは五臓六腑に染み渡る。冬の暗い空には煎り豆の絞り汁の方が、むしろ似つかわしいのではないだろうか。

「そう考えるとサンタクロースは、意外と仮面ライダーに似ているかもな」

「そうかい？　僕は今一共通点を見出せないが」

「サンタクロースがひげ面のじいさんって事とは切り離して考えろ」

士は喉を潤す為に一息でコーヒーを胃に流し込んだ。

舌を火傷しそうになってしまった。無茶をし過ぎたようだ。これは熱い。

息白し。コーヒーは充分に役目を果たしてくれた。

栄次郎の淹れる物には数段劣るが、それでも余暇を楽しむには申し分ない美味だ。

「誰に知られる事もなく自分の使命を果たす。自分の利益の為ではなく・・・ユウスケの言葉を借りるなら、顔も知らない誰かの笑顔の為に。ほらな、意外と似てるだろ」

牽強附会が過ぎると失笑を買ってもおかしくない士の主張を、しかし海東は貶めない。

普段の彼ならば失笑噴飯とまでは行かないものの、詭弁以下の妄想と断ずる言葉である筈なのに。

「・・・あるいはサンタクロースもまた、仮面ライダーなのかもしれないな。一晩で世界中の子供達にプレゼントを配達するなんざ、

何か超能力でもなければ絶対に不可能だ」

「なるほど、それはおもしろい新説だ。つまり僕らが気付いていないだけで、サンタクロースは世界のどこかに実在するという事かい？」

「もしくは世界を超える能力を持つ・・・少なくともそのどちらかだ」

士の言葉を受け、海東がその先を繋ぐ。これは良い。時間つぶしの遊興として、このサンタクロース談義はなかなか痛快だ。

「しかしもしサンタクロースがいるなら、クリスマスは彼らにとつて苦痛でしかないだろうね」

「どういう事だ、海東」

「単純な話さ。自分は辛い思いをして懸命に働いているのに、ほかの人間はお気楽ムードだ。腹に据えかねる事態だと思わないかい？」

サンタクロースの立場になれば、なるほどそういう考え方も可能だろう。

だが士は熟慮するまでもなく、その問いに対する答えが思い浮かぶ。

「考えるまでもない。その答えはNOだ」

「おもしろい。君の意見を聞こう」

まさか一にももなく否定されると考えていなかった海東は、すぐさま土に先を促す。

「それこそ単純な話だぞ、海東。大前提としてサンタクロースは、超が付くほどのお人好しだ。そしてそういうたぐいの人間は、人の幸福を喜び、尊ぶものと相場が決まっている」

光写真館に居座るもう一人の居候のように。土は内心でそう付け加える。

「クリスマスは誰もが誰かを思いやる日だ。親は子供達の為にプレゼントを用意し、友人同士で集まり、恋人達は愛を育む」

土は実在するかどうかも疑わしいサンタクロースに思いを馳せる。  
ああ。本当に、似た者同士だ。

「クリスマスは誰もが笑顔になれる日。普段より少しだけでも、優しい気持ちになれる日なんだ。だからそれは苦痛ではなく、サンタクロースにとっては至福の一時なんだろうぜ」

「．．．なるほど。他人の幸福が、そのまま自分の幸せ、か」

立ち上がり、海東はベンチを離れる。  
しかしそれ以上距離をとらず、彼は土に向き直った。

「実りはないが、なかなかおもしろい話を聞かせてもらった。これはその礼だと思ってくれたまえ」

海東は愛銃ディエンドライバーを中空に構える。  
そのあとに一枚のカードを手にするのはいつもの事だが、今回に限っては常時使用しているのと別のカードを携えた。  
彼は銃身側面中央部に設けられた挿入口にカードを装填し、銃身をポンプアクションのように前にスライドさせた。

【K A M E N ・ R I D E】

「さあ、出番だ」

【F O U R Z E E !】

海東が引き金を引いた瞬間、銃口から射出されたエネルギーが人型を形成する。

特徴的なCKETT状の頭部。宇宙服を模した白色のライダースーツ。彼こそは別世界において天ノ川学園高等学校を守護する戦士、仮面

ライダーフォーゼである。

「宇宙キタアアアアアアアッ！」

「……………なんだ、そのおかしなロケット頭は」

馬鹿馬鹿しいと一笑に付す事も躊躇した士は、その白仮面を海東は雪の代替品に呼び寄せたのだと考える事にした。

そもそも、”宇宙が来る”とはどういう事なのだ。まったくもって理解に苦しむ。

「フォーゼ、これを使いたまえ」

海東はフォーゼにそれまで持っていたスイッチを投げ渡す。

どうやら彼が所持していたのは、あのロケットライダーの装備品だったようだ。

「おう、まかせとけ！ 友達の期待には応えてみせるぜ！」

「勘違いするな。僕は君の友人ではない」

「照れるなよ。短期は損気だ！」

フォーゼは右側のスイッチソケットに収められていたスイッチを取

り外し、白のスイッチを新たにはめ込んだ。

【Snow!】

続けて上部のプッシュ式スイッチを押しこむ。

【Snow・On!】

間の抜けた電子音声と共に、フォーゼの右手に巨大な扇風機のような装備が組み上がった。

どうやらエネルギーを武器にするライダーらしい。

「おい、海東。まさかそいつがサンタクロースだ、なんて言わないだろうな」

「勿論違う。彼は言うなれば、ただのプレゼンターだよ」

海東はそれだけ言うと、両手を大きく広げながらフォーゼに指示を出す。

いよいよ何かが始まるようだ。

「見たまえ、士！これが僕からの、クリスマスプレゼントだ！」

「雪、キタアアアアアアアッ！」

プロペラファンが獰猛に回転し、唸り声を上げる。

フォーゼが天上へと手を掲げると、異変は目に見える形で現出した。土がまず目にしたのは、灰色の空だった。

白と黒が混ざると灰色になる。美術の授業で習うまでもなく、誰もが知っている極めて初歩的な知識だ。

故に土がそれを灰色と判断したのは無理からぬ事である。

それは一面の銀風景だった。

四枚羽の円運動が作り出す冷風に乗った水分をまたたく間に氷結させ、無尽蔵に粉雪を生み出す。

風を主軸にして雪が舞うさまは、巨大な樹木から白い花卉が散る様子を想起させた。

「驚いた。まさかお前が、率先して人の役に立つ事をするとはな」

「雪の降らないクリスマスなんてつまらない。きっと今頃写真館の住人も面食らっているだろうね」

この景色を見て、浮き足立たない人間がどれほどいるというのだろうか。

降り積もる雪の華が地面に根をはるたびに、街は白色に染まっ

ていく。白銀の風花が優雅に踊る姿は、どこまでもただ美しい。

「さて、写真館に行くのでしょうか。彼らがどんな反応をするのか見

物だ」

「ああ。そろそろ腹が減ってきたしな」

士は海東の近くまで歩み寄る。

思わぬ感動を享受してくれた彼に、最低限の礼節は欠かさない。

「一応、礼を言っておくぞ」

「よしてくれ。背中に悪寒が走って仕方ない」

「それもそうだ。俺もお前に頭を下げるのはしっくりこない」

お互いに気安い皮肉を交換しながら、二人は公園を後にする。

士は空っぽの缶コーヒでジャグリングの真似事をしながら、雪の夜を駆けるサンタクロースの姿を思い描いた。

クリスマスは彼にとって幸福な一日かもしれないが、雪はさすがに傍迷惑なのではないか、と。

ただでさえ寒いというのに、余計に寒風吹き荒び、視界が遮られてしまふのは拷問と言えよう。

「大変だな、サンタクロースのじいさんも」

『そんな事はないよ、士くん』

視界が停止した。雪も、風も、音も、そして傍らの海東大樹さえも。時間が止まっているのだと気付くのに、それほどの時間は必要なかった。

最初に驚いたのは、非現実を一瞬で受け入れることができる自分がいる事だった。

異世界の強敵と戦い続けた事で、神経がず太くなったらしい。

「これはあんたの仕業・・・なんだろうが。雪は邪魔にならないのか？」

『雪は痕跡を消すのに便利なんだ。何より、きれいだからね』

表情は読めない。当然だ。彼　もしくは彼女　は、仮面を被っている。

白い装飾が施された赤いスーツで全身を隠すその姿は、まさしく人間の自由と平和を守る戦士、仮面ライダーのそれだった。

「こうして時間を止めている間に、プレゼントを配って回ってるってわけか。子供達のヒーローが、こんなところで道草しているのか？」

『それは問題ないよ。それよりも・・・なるほどね』

一人得心が行った様子で頷く。

「何の話だ？」

『鳴滝という人から聞いた話とは違うと思ってね。最初からあの人の言う事は信用していなかったけど、君はとても正直でまじめで、情の深い人間のようなだ』

鳴滝というのは士と悪い意味で縁の深い人物だ。

様々な世界で彼の悪評を伝搬しているのだが、まさかこの人物に接触していたとは。

しかしそれはそれとして、背中がむず痒くなる評価だ。

他人に褒められるのは悪い気分ではないが、どうにも過大にすぎるくらいがある。

『君とはもっとお話ししたい事があるけれど、この時間停止はそう長く使えるわけではない。残念ながら、ここらでお別れだ』

鈴の音が鳴り響く。乾いた音色ではあったが、とてもあたたかいメロディだ。

「何をしているんだい、士？」

時の止まった世界から解放された海東は、その事自体に気付かぬままだった。

「．．．．サンタクロースは、白ひげのじいさん。誰がそう決めたんだろうな」

「それはどういう意味だい？」

「いや、なんでもない。さっさと行くぞ」

「ふうん、そうかい？」

それきり士は後方を一瞥することなく、公園を後にした。

先程の短いやり取りが一体何を意味するものなのか。それは士にも分からない。そういうたぐいのものだったと彼は認識している。

あるいはサンタクロースの存在を肯定した士に対する、感謝の念からの行動だった．．．その考えもやはり妄想の域を出ない事ではある。

しかし、だからこそ余計に信じたくなる。

『メリークリスマス、士くん』

「ああ。メリークリスマス、サンタクロース。あんたが子供達に幸福を授けるように、俺達は世界を守ってみせるさ」

新たな決意を胸に、士は皆の待つ光写真館へと帰還した。

冷たい雪が降り積もり、冬の夜は静かに宴の時を形成する。

幸せに満ちた長い夜の始まりだ。誰もが幸福を謳い、誰もが清福を尊ぶ。

人々はみな笑顔になる。いつもより優しい気持ちになれる。

そんな一日の最後の一時に、

祈りの夜に、雪は降る。

「・・・・・・・・ハックション！」

白雪に彩られた公園に、白い人影が一つ。というより、その人物は全身が白かった。

海東に呼び出された、仮面ライダーフォーゼその人である。

「俺、いつまでこうしてれば良いんだ・・・・？」

しかしこの問いかけに答えを返す者は、誰一人としていなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8051z/>

---

祈りの夜に雪は降る

2011年12月25日19時45分発行